

鹿児島県・喜界島のエビ・カニ類について

黒江 修 一*

Documentation of Shrimps and Crabs on Kikaijima, Kagoshima Prefecture.

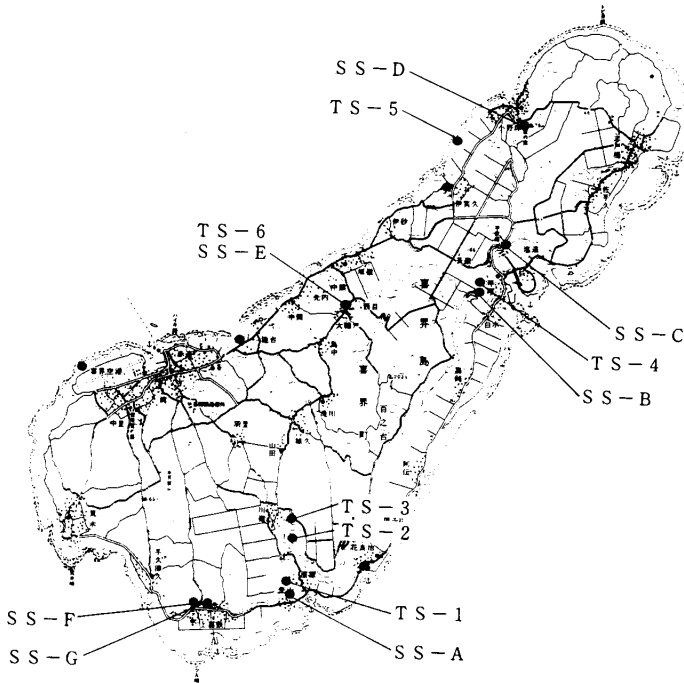
Syuichi KUROE

I はじめに

筆者は、大島郡喜界町で甲殻類の資料収集を行う機会を得た。喜界島における淡水産エビ・カニ類の分布と生態についての調査は、これまでほとんど行われていない。今回の調査で数種を収集し、生息状況についていくつかの知見を得たので報告する。

II 調査採集方法

調査は1997年1月18日から1月20日に喜界町の川と池で実施した。川および湧水付近ではタモ網（SS-AからSS-G）で、また池ではトラップ（TS-1からTS-6）を用いて採集した。トラップはカニ籠を使い、餌にはイワシを用いて一晩設置しておいた。サワガニは川の上流および湧水付近を採集地点とし、石の裏を探しながら採集した。



図一 採集地および調査地点

* 〒892：鹿児島市城山町1-1 鹿児島県立博物館

Ⅲ 調査結果

今回の調査で採集された陸水産甲殻類は、4科4属6種であった。喜界島には大きな川は存在しないが、島のいたる所に湧水がみられ、そこにできた池から、小さな流れが海へ注いでいる。採集場所のほとんどが、湧水付近である。

喜界島で採集された陸水産甲殻類

ヌマエビ科

トゲナシヌマエビ *Caridina typus* H.Milne Edwards,1937 7, I-18, 早町
29, I-19, 先山

河口から上流まで広く分布する種で、鹿児島県では、薩摩半島中部、大隅半島東部と中西部から与論島まで知られているが、今回初めて喜界島での生息が確認された。

テナガエビ科

コンジテンテナガエビ *Macrobrachium lar* (Fabricius,1798) 2, I-18, 先山
1, I-19, 伊実久
1, I-20, 大朝戸

河口から上流まで生息する両側回遊種で、鹿児島県では、薩摩半島南部、大隅半島南西部から沖永良部島まで知られているが、喜界島での採集報告はなかった。大朝戸で採集した個体は他の地域で採集した個体よりも大型で体長が125mmであった。

ヒラテテナガエビ *Macrobrachium japonicum* (De Haan,1849) 4, I-18, 先山
16, I-19, 小野津
2, I-20, 大朝戸

河口から上流まで生息する両側回遊種で、鹿児島県では、薩摩半島西部、大隅半島東部と南西部から沖永良部までの島々に生息している。

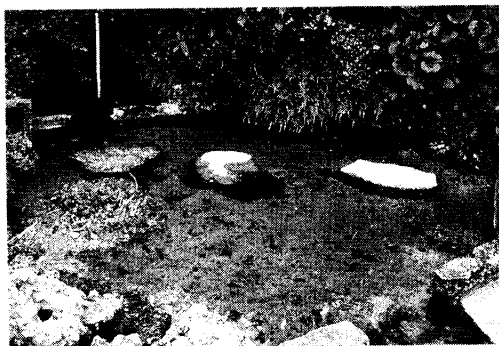


写真1 湧水(早町付近)の概観



写真2 川(先山付近)の概観

ミナミテナガエビ *Macrobrachium formosense* Bate, 1868

4, I-18, 伊実久

河口から上流まで生息する両側回遊種で、鹿児島県では、県本土のほぼ全域と沖永良部島まで知られている。ただし、トカラ列島では採集されていない。喜界島で採集されたのは今回が初めてである。

イワガニ科

モクスガニ *Eriocheir japonicus* De Haan, 1835

5, I-19, 先山

1, I-20, 大朝戸

1, I-20, 早町

河口から上流域、水田などにも生息し、鹿児島県全域に極めて普通にみられる。喜界島では、南部の先山にある湧水付近にできた溜池で約30個体の生息を確認した。ここで確認した個体はいずれも中型のものであった。また、中部の台地大朝戸にある湧水付近にできた2箇所の溜池で約10個体の生息を確認した。さらに、早町から長嶺に至る台地の途中にある池ではトラップにより、甲幅が47mmの個体を採集した。伊実久にある湧水付近にできた2箇所の溜池でも本種の脱皮殻を確認したので、トラップによる採集を試みたが収集はできなかった。また、南部の台地川嶺にある大きな2つの池でトラップによる採集を試みたが、得られた資料は、テラピア1個体のみで本種の収集はできなかった。両側回遊種である本種は海とつながる流れがあるところでは生息できるが、台地にある比較的大きな池であっても海とのつながりがない池では生息が難しいと思われる。

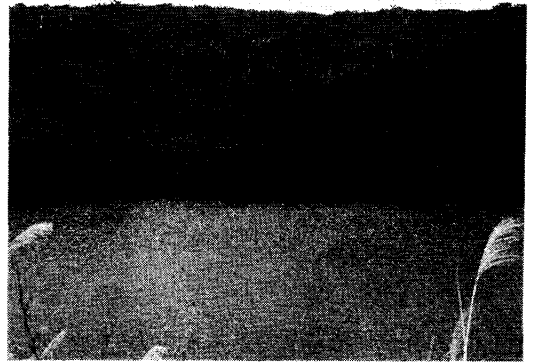


写真3 池(川嶺付近)の概観

サワガニ科

サカモトサワガニ *Geothelphusa sakamotoana* (Rathbun, 1905) 8, I-20, 上嘉鉄

琉球列島に固有の種類で、サワガニと同じように山間の小川や清流の石の下や岸辺に穴を掘って生息する。鹿児島県では、これまでトカラ列島の宝島、奄美大島、徳之島で分布が知られていたが、今回、初めて喜界島での生息が確認された。生息地は、島の南部上嘉鉄にある湧水から流れる小川付近である。個体によっては、水辺から十数m離れた畑の土手に横穴を掘り、すでに冬眠しているものもみられた。

筆者らが1995年8月に徳之島で採集した個体の体色は、甲背面、ハサミ脚、歩脚とも淡い黄色であった。これがサカモトサワガニの標準的な体色として図鑑等で紹介されているが、今回喜界島で採集した個体の体色は、甲背面が青紫、ハサミ脚が淡い赤褐色であった。また、甲幅も一般に知られているものに比べて、小形の個体が多かった。

オカヤドカリ科

ムラサキオカヤドカリ *Coenobita purpureus* Stimpson, 1858

I-18, 伊実久

鹿児島県では、トカラ列島から奄美諸島に分布する。成体の体色は青紫色である。伊東氏らに案内してもらった伊実久の海岸で生息を確認し、写真資料として記録した。

喜界島で採集された海水産甲殻類

スナガニ科

ミナミスナガニ *Ocyroide cordimana* Latreille, 1881

1, I-20, 花良治

中里および池治の海岸でも生息を確認した。本種もスナガニと同様、砂浜の高潮線上部に穴を掘ってすんでいる。歩脚の先が平たくとがっているのが穴を掘るのに都合がよい。眼も発達しており、行動が素早い。

IV おわりに

喜界島で採集した陸水産甲殻類の生息状況と特徴を記録した。きれいな水の指標生物にあげられているヌマエビやサワガニの生息が確認できたのは、島の至るところに湧水が見られる喜界島ならではの状況といえる。地元では大きなエビをタラカア（早町）あるいはタナギ（先山）、小形のエビをセーブウ（早町）あるいはセー（先山）とよび、カニをガイーとよんで親しんできたという。しかし、エビやカニが昔よりも随分少なくなったとの声を島の古老から聞いた。実際、限られた範囲にしか生息が確認できない種もみられた。喜界島におけるエビやカニの調査は始まったばかりであるが、自然のバロメーターとしてのエビやカニの生息調査は今後も続ける必要がある。

最後に、鹿児島大学水産学部の鈴木廣志助教授には陸水産甲殻類の同定を快く引き受けていただき、また、鹿児島県立喜界高等学校の伊藤博仁・東福英朗の両氏、および喜界町中央公民館の福岡功彦氏には採集地を案内していただく等大変お世話になった。心からお礼を申し上げる。

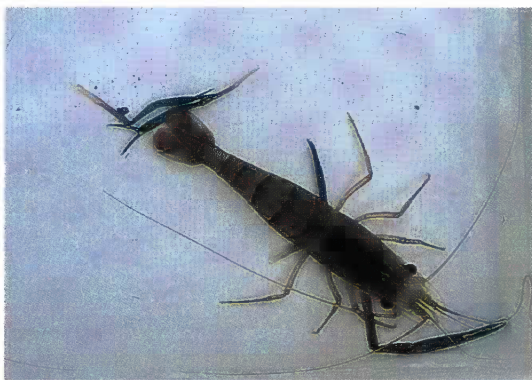
参 考 文 献

- (1) 鈴木 廣志・佐藤 正典(1994) 淡水産のエビとカニ かごしま自然ガイド 西日本新聞社
- (2) 武田 正倫(1982) 原色甲殻類図鑑 北隆館 東京
- (3) 三宅 貞祥(1982) 原色日本大型甲殻類図鑑(Ⅰ) 保育社 東京
- (4) 三宅 貞祥(1983) 原色日本大型甲殻類図鑑(Ⅱ) 保育社 東京

喜界島の甲殻類



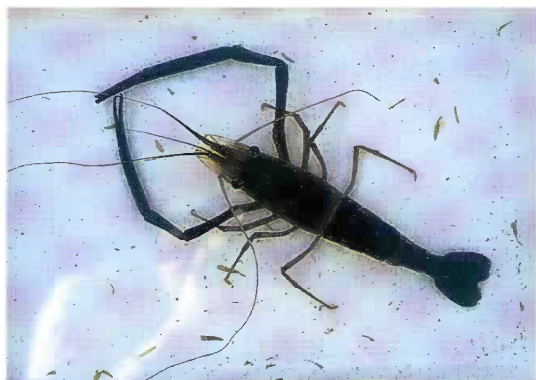
トゲナシヌマエビ(先山)



ヒラテテナガエビ(大朝戸)



ミナミテナガエビ(伊実久)



コンジテナガエビ(大朝戸)



ムラサキオカヤドカリ(伊実久)



サカモトサワガニ(上嘉鉄)